

聖書:士師記7章9～25節

説教:主は渡される

はじめに

カナンの地で主の目に悪であることを重ねたイスラエルは、七年のあいだミディアン人苦しめられました。苦しみに耐えかねてイスラエルが主に叫び求めると、主はギデオンを召し出し、あなたがイスラエルを救うのだと告げます。しかしギデオンはこれを聞いて非常にとまどい、権威もなければ経験もない自分にそんな大それた事ができるはずがないと言って尻込みをします。それでも主はギデオンを励まし前に進めさせ、三万二千人の兵士が集まりました。これでもまだ人が足りないと思っていたら、主は意外なことに、兵士の数がは多すぎるのでと語って次々と兵士を去らせ、最後に三百人が残るようにする。これでどうやって戦うのかと言って動揺する兵士たちを、ギデオンはなんとかなだめすかして引きとどめた。それが前回までのあらすじです。

この戦いは結局どうなったか。野球に例えれば地方の名もないチームが優勝候補の強豪チームと戦い、試合前の予想どおりに九回の裏ツーストライク、ツーアウトに追い込まれてしまう。ところが、最後の打者が奇蹟的に満塁ホームランを打って逆転勝利を取めたようなものでしょう。目にはそのようにしか見えない。でもそれがすべてではありません。もっと大切なことも記されているはずです。そのことを見てまいります。

1 ギデオン

1) 恐れる

ギデオンは兵士を引きとどめはしましたが、なにか作戦があったわけではありません。どうするかまったく分からないまま時間だけが流れ、とうとう戦いが目前に迫ってきました。そのときようやく主はギデオンに語ります。9節。「立って、あの陣営に攻め下れ。それをあなたの手に渡したから。もし、あなたが下っていくことを恐れるなら、あなたの従者プラと一緒に下って行き(なさい)。」

これまでギデオンは、主から奇蹟を何度も見せていただいて励まされてきていました。あれだけ奇蹟を見たら何があっても怖くない、と思いきや、ギデオンはそれでも怖かった。それで、ほんとうは一人で行ってもよかったのに、彼は従者プラを連れていきます。

2) 彼らが何を言っているかを聞け

主のことばは続きます。11節。「彼らが何を言っているかを聞け。その後、あなたの手は強くなって、陣営に攻め下ることができるようになる。」これをギデオンが聞いてどう考えたでしょうか。主は、「彼らが何を言っているかを聞け」としか語りません。そこでどんなことを聞くのかは言わない。なので、どうして自分の手が強くなるのか、まったくわからない。それでもギデオンは主が言われたとおりに従っていきます。

3) 力ある勇士

ギデオンが召し出されたとき、主の使いは「力ある勇士よ」と言って声をかけました。でもギデオンは怖くて一人で行けず、プラを連れていく。とても「勇士」とは思えない。どうも、主にとっての「勇士」は私たちの考える「勇士」とはかなり違うようです。自信がなくても怖くても、とにかく主に従っていった。そんなギデオンを、主は「力ある勇士」と呼んでいるようです。

私たちも、大切なことを決めなければならないときに、祈りながら待っていると不思議に聖書のみことばから示されることがあります。それで決断をする。でも、その先にどうなるのかまでは具体的には教えてくれない。先がわからないけれど従う。従うけれど、どうなるか不安になることがあります。もっと先のことを教えてくれたらと思うことがあります。でもパウロはローマ書8章25節でこう語っています。「私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」ギデオンはこのようにして忍耐しながら信じるということを手伝っていったのかも知れません。

2 ミディアン人が見たもの

1) 夢の話と解釈

さて、ギデオンが夜の闇に紛れて敵の陣営に潜り込むと、天幕の中から二人の話し声が聞こえてきます。13節。「聞いてくれ。私は夢を見た。見ると、大麦のパンの塊が一つ、ミディアン人の陣営に転がって来て、天幕に至り、それを打ったので、それは崩れ落ちて、ひっくり返った。こうして天幕は倒れてしまった。」

これを聞いていたもう一人の相手の顔色がさっと変わります。「それはイスラエル人ヨアシュの子

ギデオンの剣でなくて何であろうか。神が彼の手に、ミディアン人と全陣営を渡されたのだ。」

2) ギデオンと神

ギデオンは二人のやりとりを聞いて腰を抜かすほど驚きます。理由は二つありました。一つ目。外国人である彼らが、ギデオンの名前をなぜか知っているのです。もともと由緒ある名家の生まれで、末は大臣か王さまになる、そういう有名な人ならば別におかしくない。ところがギデオンはそうではない。力もない家の目立たない若者に過ぎなかった。それが父の名前と一緒に自分の名前が覚えられるほどに、ミディアン人が自分を恐れているのを知った。それで驚いた。

そして二つ目。「神が彼の手に、ミディアン人と全陣営を渡されたのだ。」これを話しているのはミディアン人です。その人の口からまさか「神が渡されたのだ」と聞くとは思わなかった。それで驚く。でもいったいどうしてそのようなことを言うのか。

ミディアン人はイスラエルに襲いかかろうとしています。こういうときは、事前に敵の中に偵察部隊を送り情報を探り出すのが常套手段です。そのとき偵察隊の耳にもギデオンのことが聞こえてきた。ギデオンという若者が兵を集め、ミディアン人を待ち構える準備をしている。そのギデオンにはイスラエルが信じる神がともにいて、その神は奇蹟をなんども起こした。それを聞いてミディアン人は、いま自分たちはとんでもない敵と戦おうとしているのではないかと不安になり、それが夢になって現れてきたということでしょう。

ギデオンはこれを聞いてどうしたか。15節。

「ギデオンはこの夢の話と解釈を聞いたとき、主を礼拝し、イスラエルの陣営に戻って言った。

『立て。主はミディアン人の陣営をあなたがたの手に渡された。』」

ギデオンが偵察に出る前、主は「彼らが何を言っているかを聞け」としか言われなかった。でも今すべて分かりました。このようになさっているのは誰なのか。まさに神ご自身がすべてを御支配し、敵のこころを揺り動かしている。自分は何もしていないのに、主がすでにミディアン人と戦っておられた。それを知ったとき彼は礼拝し、このとき初めて「あなたの手が強くなる」と主が言われたその本当の意味がわかりました。

3) 「主のため、ギデオンのため」

ギデオンはただちに陣営に戻り、念入りに装備を整えて出陣の準備をします。手に持ったのは刀や槍ではありません。その代わりに右手に角笛、左手にたいまつを入れた壺を持たせる。寝込みを襲われた敵の陣地は暗闇の中で大混乱に陥り、同士討ちが始まります。

その戦いの時、彼らが叫んだことばに注目します。20節。「主のため、ギデオンのための剣」と叫んでいます。不思議に思いませんか。ギデオンは主が戦っておられることを悟って、主を礼拝しました。ですから「主ため」と叫ぶのは理解できます。ところがその後、「ギデオンのため」と付け加える。これはなにか。ギデオンは自分を誇ろうとしているのか。もちろんそんなはずはない。

ギデオンが聞いた二人のミディアン人の会話を思いだしてください。「それはイスラエル人ヨアシュの子ギデオンの剣でなくて何であろうか。」

ミディアン人がこのとき何を見ていたのか、このことばがはっきりと示しています。言うまでもなく、イスラエル人ヨアシュの子ギデオンを恐れています。肉の目で見える姿としてギデオンが剣をもって自分たちを待ち構えている。そのように見えています。

でもギデオンだけが見えていたのではない。彼らの目にはもう一人見えています。「神が彼の手に、ミディアン人と全陣営を渡されたのだ。」肉の目には見えていなくても、ギデオンとともに神が立っている、その神がミディアン人と戦おうとしている。そう見えている。でもその神とはどの神であるのか。バアルなのかそれとも違う神なのか。ミディアン人は、そこまで分かっていたわけでない。とにかくすごい力を持った「神」、それくらいの思いでミディアン人は神と言ったのでしょうか。

でもギデオンにとって、まさにそのことが大きな問題だったのです。というのは、彼は召しを受けたときに最初に学んだ大切なことがありました。ギデオンの父親が建てたバアルの祭壇を壊し、その上に主の祭壇を築きなさい。主からそのように言われたときです。彼はそこではっきりと知った。自分とともにおられる神はバアルではない、主である方。自分が仕えているのは主と呼ばれる方である。そのことを、ミディアン人に、そして同時に、ギデオンの同胞であるイスラエルにも教えるために、「神のため」ではなくて「主のため」と叫びます。

3 主

1) 主とギデオン

神の姿が見えればよいのと思う方はたくさんいますが、残念ながら直接見ることはできません。神の偶像も造ってはならないとも言われますから、なおさら神が見えません。それでも私たちは神を見たいと願うわけです。どのようにして神を見ることができるのか。ギデオンのことから教えられます。神は誰かの一人の信仰者を通してご自身の姿を現してくださる。もう一度14節を読みます。「それはイスラエル人ヨアシュの子ギデオンの剣でなくて何であろうか。神が彼の手にも、ミディアン人と全陣営を渡されたのだ。」

彼らは信仰者ではありません。それでもギデオンを通して神が見えていた。それもブルブルと震え上がるほどの恐ろしきで神の御臨在が迫ってくるほどであった。

なぜ神を直接見るができないのかと不満であったかもしれませんが、神の姿が見えないのは実は幸いなことだったと言うこともできます。

2) 救い

最後に考えなければならぬことがあります。イスラエルは主の目に悪であることを行っていました。いったいその罪はどうなったのでしょうか。彼らが救われたということは、彼らの罪が赦されたこととなります。いったいどのようにして赦されたのか。罪の赦しの原理はいつも同じです。イエス・キリストがこのイスラエルの罪を背負われました。だから救われる。では、主が背負われた罪に対するさばきはどれほど厳しかったのか。

今日の箇所には、二人の首長がそれぞれ、岩の上とぶどうの踏み場で殺されたと書かれています。イスラエルは主の目に悪であることを行っただけから、本来はイスラエルが岩の上、ぶどうの踏み場で殺されても文句は言えなかった。ところが、イスラエルを苦しめたミディアン人の側がこ殺される。なんと残酷なことを聖書は書くのかと戸惑ったかも知れません。では私たちは残酷なことに手を染めなかったのか。無実なのか。十字架で主を殺したのは誰ですか。私たちです。いったいどちらが残酷なのでしょう。

主が耐え忍ばれたさばきの厳しさを思い起こすとともに、私たちが十字架でいただいた恵みがいかに深いものであったのかを覚えます。